

第4回自治医科大学附属病院地域医療連携研究会

高 齢 者 医 療 の 地 域 連 携

日 時 平成27年2月7日(土) 18時~20時

場 所 ホテルマイステイズ宇都宮

テーマ 高齢者医療の地域連携

研究会 第一部 講 演

第二部 パネルディスカッション

主 催 自治医科大学附属病院

後 援 栃木県医師会 栃木県歯科医師会

【 講 演 】

I 『 高齢者高血圧症の降圧療法 』

新小山市民病院 理事長・病院長 島田和幸

高血圧の病態は神経・体液性循環調整因子よりも心血管系の肥大・硬化などの構造的要因が加齢とともに優位になる。高齢者高血圧は、血圧が変動しやすいことと臓器障害が進行していることが特徴である。高齢者の究極の目標は、老いてなお健やかさを保つことである。国内外の大規模臨床試験は高齢者高血圧の降圧治療が有用であることを明らかにしたが、降圧目標値と予後の関係については、必ずしも the lower, the better は証明されなかった。2025年、来たるべき超高齢化社会を控え、医療・介護の現場における最も切実な問題、超高齢者や要介護者に対する降圧療法の意義については、未だ明確な答えは出されていない。

II 『 認知症の診断・治療・ケア 』

新小山市民病院 副院長・神経内科 川上忠孝

認知症の現在の有病率は65歳以上の15%、462万人と推定され、その予備軍(認知症の前段階である軽度認知機能障害:MCI)も400万人と推定されています。現在では、認知症は小児科以外の全ての科が何らかの関わりを持たざるを得ない国民病と言っても過言ではありません。人口の高齢化と共に認知症患者は増加の一途を辿っており、特に団塊の世代が老年期にさしかかってくるとその数は飛躍的に増加することが予想されます。その状況下では医療従事者は認知症に対する正しい理解が不可欠といえるでしょう。今回の講演では、認知症の中で最多と言われるアルツハイマー病(AD)、ADに次いで多いともいわれるレビー小体型認知症(DLB)、症状が特徴的な前頭側頭型認知症(FTD)、或いはMCI等について、その症状や診断・治療法、ケアのあり方や、認知症における病診連携のあり方などについて解説を加えたいと思います。

III 『 総合診療内科の高齢者入院患者の特徴 』

自治医科大学 総合診療内科 教授 松村正巳

平成25年10月より、自治医科大学附属病院総合診療部は「総合診療内科」と名称を改め、内科の一部門として診療を開始しました。当科の特性として、救急経由例、診断困難例が多く、疾患では、市中肺炎、嚥下性肺炎など感染症が半数を占めています。感染症以外では、原発不明癌も少なくありません。人口の高齢化に伴い、当科の入院診療も高齢化を反映した特徴を有していると思われます。

今回は、平成25年10月から26年9月末までの1年間の統計から高齢入院患者の特徴を明らかにし、ケア・病診連携のあり方について提言をさせていただきます。

【パネルディスカッション】

～ 『 高齢者医療における地域医療連携・地域包括ケアを考える 』 ～

司会 医療法人アスムス 理事長 太田 秀 樹
自治医科大学地域医療センター 准教授 三瀬 順 一

これからの地域医療の充実にとって、地域医療連携・地域包括ケアの推進は欠かせない。このパネルディスカッションでは、まず鶴岡優子先生に在宅医療と地域連携の現状をお話いただく。秋元哲先生には、透析導入を見送った高齢末期腎不全症例、安食孝士先生には、高齢者大腿骨近位部骨折における地域医療連携、野口忠秀先生には、高齢者の口腔がん治療後の地域医療連携・包括ケアについてお話いただく。ご質問・要望いただいた事項についても討議したい。

パネリスト

つるかめ診療所 総合内科 鶴岡 優子

「 在宅医療と地域連携～小さなつるかめ物語 」

自治医科大学 腎臓内科 准教授 秋元 哲

「 当科において透析導入を見送った高齢末期腎不全症例の実態 」

自治医科大学 整形外科 准教授 安食 孝士

「 高齢者大腿骨近位部骨折における地域医療連携について 」

自治医科大学 歯科口腔外科 講師 野口 忠秀

「 当科における高齢者の口腔がん治療後の地域医療連携・包括ケアについて 」